九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『見出された時』におけるゴンクールの未発表擬似日記

吉川, 一義
京都大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/4355446

出版情報：Stella. 39, pp.1-17, 2020-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

『見出された時』における
ゴンクールの未発表擬似日記*)

吉　川　一　義

『失われた時を求めて』の最終篇において主人公は，サン＝ルー夫人ジルベルトをタンソンヴィルに訪ねるが，少年時代をすごした想い出の地へ戻っても心を動かされず，「想像力も感受性も衰えてしまったという感慨」(IV,267;⑬ 22) [1] にとらわれ，文学的才能の欠如を痛感する。その想いをいっそう募らせたのは，滞在最後の夜に読んだゴンクール兄弟の「日記の未発表の一巻」である。そこに数頁にわたり引用された日記（IV,287-295;⑬ 61-86）は，ゴンクールの本物の日記ではなく，プルーストが文体模写（パスティッシュ）の手法を用いて，エドモン・ド・ゴンクールにヴェルデュラン夫人のコンティ河岸のサロンを描写させた擬似日記である [2]。

エドモンとジュールのゴンクール兄弟は，1851 年から共同名義で，弟が没した 1870 年からはエドモン単独名義でその死の前年（1895 年）まで，当時の社会と文壇の詳細を日記に綴った。日記といっても，個人的な備忘録ではなく，「文学的生活の回想録」という副題が示すように出版を前提とした回想録であり，同時代の作家たち（サント＝ブーヴ，ゴーチエ，フロベール，ゾラ，テーヌなど）の興味ぶかい逸話を読者に提供するのが眼目であった。エドモンはこの『日記』の抜粋を 1887 年から 1896 にかけて 9 巻にわけて刊行した。

プルーストは 20 代の青年期に，アルフォンス・ドーデ家やマチルド大公妃邸でエドモン・ド・ゴンクールに会っていた [3]。『失われた時を求めて』にとりかかる少し前の 1908 年 2－3 月，ルモワーヌによるダイヤモンド偽造事件を素材にさまざまな 19 世紀作家の文体を駆使して発表した一連の文体模写には，ゴンクールのそれも含まれていた。プルーストの文体模写の校訂版を作成したジャン・ミイの詳細な注釈によると，作家はこの模作を作成するにあたり，すでに出版されていたゴンクールの『日記』を渉猟していた [4]。プルーストは，1908

年末から1909年初頭にかけても，メモ帳「カルネ1」に『日記』からの抜粋をつぎつぎとメモしていた[5)]。このメモは，和田章男が指摘するように，そのころとりかかった『サント＝ブーヴに反論する』の一環として，社交と会話を重視したゴンクールの日記文学のありかたを批判する準備だったようである[6)]。

さてプルーストが，『失われた時を求めて』に採りこむべく，ゴンクールの「未発表の日記」をめぐる最初の草稿を書きつけたのは，「カイエ55」においてである。ジャン・ミイはこの草稿の執筆時期を1917年以降と推定したが[7)]，すでに論証したように，これは1915年頃と考えるべきである。プルーストは1915年11月，シェイケヴィッチ夫人へ送った『スワン家のほうへ』の献辞に，小説の当時未刊行であったアルベルチーヌをめぐる物語の概要を記した。この概要は「カイエ55」と「カイエ56」の草稿から十数箇所を抜粋して作成されたものであり，ゴンクールの日記の下書きはこの草稿の途中に挿し挟まれて執筆されたから，当然この献辞以前の執筆と推測されるのである[8)]。

この執筆時期は，他の資料によっても追認できる。『マルセル・プルースト書簡集』の編纂者フィリップ・コルブが1915年3月11日の執筆と推定したリュシアン・ドーデ宛て書簡によると，プルーストは「ゴンクール兄弟の『日記』のたまたま開いた巻」のなかに「ヴィクトル・ユゴーの葬儀の日にかんして信じがたい記述が多数あること」に気づき，「あなたか私の作成した文体模写を読んでいる気がした，〔…〕ゴンクールがラップランドにおける自作への崇拝を語った一節の場合と同じだ」（傍点は引用者）と指摘した[9)]。引用末尾の文言は，ゴンクール『日記』の1885年の「巻」に出てくるつぎの文章に基づく――「ベレンドセン[10)]がユイスマンスに語ったところによると，デンマークやボスニアやバルト海周辺諸国では私に一種の崇拝が捧げられているようで，文学に心得ある者は，おのが尊厳を失わず，寝る前には欠かさず『ラ・フォースタン』なり『シェリ』[11)]なりを読むという」[12)]。さきに引用した「あなたか私の作成した文体模写」という文言は，プルーストが自分で作成したか作成しようとしていた「文体模写」を想いうかべていたことを示唆する。実際，「カイエ55」に書きつけられた文体模写の最初の草稿には，いま提示したゴンクールの日記に触発されたとおぼしいこんな記載がある――「若い娘は婚約者がシェリやラ・フォースタンの讃美者と判明せぬかぎり金輪際（こんりんざい）結婚を首肯せぬという」[13)]。この一文は，『見出された時』の最終稿となるつぎの文章がすでにこの段階でほぼ

完成していたことを示している――「若い娘は婚約者が『ラ・フォースタン』の讃美者と判明せぬかぎり金輪際結婚を首肯せぬという」(IV,289;⑬ 71)。

1915 年執筆説を裏づけるかのように，実際この年には，メモ帳「カルネ 3」にゴンクールの『日記』からのメモが集中して書きつけられている。それらはアントワーヌ・コンパニョンが詳しく注記したように，目下検討している文体模写のためのメモであった[14)]。プルーストはこの文体模写を，なぜ，いかなる事情で，1915 年に，とりわけ「カイエ 55」に記したのだろうか。1915 年という執筆時期は，エドモン・ド・ゴンクールが遺言で「この日記の出版は私の死後 20 年を待つこと」[15)] と指定した期日（1916 年 7 月）の前年にあたる。この遺言とそれに伴う議論に通じていたプルーストは遺言期日の到来を「恰好の機会」として文体模写にとりかかった，とアニック・ブーイヤゲは推定した[16)]。しかし実際には，存命作家たちのプライバシーに鑑み，アカデミー・ゴンクールは日記の公開をさらに 5 年間（1921 年まで）延長する決定をくだし，ついで期日はさらに 1925 年まで延長され，全体が刊行されるには，死後 20 年どころか，1956–1958 年刊行のロベール・リカットによる校訂版 25 巻を待たなければならなかった。

プルーストがゴンクールの「未発表日記」の草稿を書きはじめたのが 1915 年であり，それが当時『囚われの女』の原型を執筆していた「カイエ 55」であったのは，当初から作家に，『囚われの女』で語られるヴェルデュラン家のコンティ河岸におけるサロンの描写と，擬似ゴンクールの語る同サロンの描写とを比較対照して提示する意図があったからではないか，と筆者は考える。「ゴンクールの兄弟の未発表日記の一巻」[17)] をめぐるこの文体模写が『見出された時』のタンソンヴィル滞在に配置されるのは，1916–1917 年頃執筆の清書原稿の段階にすぎない。

プルーストがゴンクール兄弟の『日記』のいかなる部分をどのように利用して擬似日記をつくりあげたかについては，すでに挙げた文献に詳しい。本稿では，文体模写それ自体の分析によって，この擬似日記が『失われた時を求めて』のなかでいかなる機能を果たしているかに絞って考察したい。

*

この擬似日記によると，エドモン・ド・ゴンクールはコンティ河岸のヴェル

デュラン家の晩餐に招待され，そこでブリショやコタールやスワンといった『失われた時を求めて』の登場人物たちと会食をする。実在の人間エドモンがこれら架空の人物と実際に会食したありさまを『日記』に書き記すことなどありえないから，これがプルーストの純然たるフィクションであることは明白である。それゆえ，本物の『日記』の未発表部分がこの文体模写執筆の時点で未刊であるか既刊であるかは，本模作の「本当らしさ」の度合いにはなんら影響を与えない。それよりも問われるべきは，この文体模写に描かれたヴェルデュラン家での晩餐が『失われた時を求めて』の物語のどの時期に位置づけられるかであろう。

晩餐には，ゴンクールの相客として「ヴィラドベツスキーなるポーランド人彫刻家」や「オフの名のつく大公妃」(IV,289;⑬69）が登場する。これはヴェルデュラン夫妻の別荘ラ・ラスプリエールの常連であった「スキー」と「シェルバトフ大公妃」にほかならない。ヴェルデュラン夫妻がバカンスで滞在中のノルマンディー地方において「囲い農地」の「柵を残らず撤去せずにはいられなかった」(IV,291;⑬78）という擬似日記の記述も，ラ・ラスプリエールでヴェルデュラン氏が「ほかの人ならおそらく二の足を踏むような場所にまで私たちを案内して，たとえ私有地であっても放置されていれば柵をはずしたりした」(III,387;⑨337）という記述と符合する。

会食者としてスワンが登場するからといって，この擬似日記に描かれているのは「スワンの恋」(およそ1870年代末から1880年代初頭）の舞台となったヴェルデュラン家のサロンであると考えるのは[18]，正しい解釈とは思われない。なぜなら「スワンの恋」の時代，ヴェルデュラン夫妻のサロンは「モンタリヴェ通り」(III,707;⑪31）に存在したからである。この擬似日記の記述は，夫妻の館がコンティ河岸にあること（IV,288;⑬62），そこがかつて「歴代ヴェネツィア大使の館」(同上）であったこと，すぐそばに「プチ・ダンケルク」(IV,288;⑬64）なる店が存在したことなど，すべて『囚われの女』に描かれたコンティ河岸のサロンと合致する。

ただし『囚われの女』におけるヴェルデュラン家での夜会の時点で，スワンはすでに他界している。『ソドムとゴモラ』におけるラ・ラスプリエール滞在は19世紀末のできごとと推定され，『囚われの女』におけるヴェルデュラン邸での夜会は1900年頃に位置づけられる。文体模写に描かれたヴェルデュラン夫人

のサロンをエドモン・ド・ゴンクールが訪れたのは，もちろんその死の 1896 年より以前，つまり『囚われの女』に描かれたコンティ河岸の夜会より数年前のことと考えるべきだろう。ではゴンクールの擬似日記に描かれたサロンに，ずいぶん前にヴェルデュラン家から追い出されたはずのスワンが登場しているのはなにゆえであろう。この疑問については，あとで検討しよう。

さて主人公が「未発表日記」を読んだタンソンヴィル滞在は，いかなる年代に位置づけられるべきか。ジュネットはこの滞在を「1903 年？」と推定する[19]。しかし本滞在に先立つ『消え去ったアルベルチーヌ』のヴェネツィア滞在において，ノルポワ元大使とヴィルパリジ夫人とのあいだで話題になるイタリアの政治情勢は，ソンニーノ内閣の終焉といい，ヴィスコンティ＝ヴェノスタが派遣されたアルヘシラス会議といい，1905-1906 年のできごとである[20]。この歴史的事件より後に位置するタンソンヴィル滞在は，むしろ 1900 年代後半のできごとと考えるべきだろう。この時期は，エドモンの死からおよそ 10 年後，つまり遺言に記された「死後 20 年」（1916 年）という期限のかなり以前に相当する。この時期，ジルベルトはなぜゴンクールの日記の「未発表の一巻」をタンソンヴィルに所有していたのだろう。これについて『見出された時』の本文はなにも語っていない。「蒐集家スワン」（IV,289;⑬ 69）は，擬似ゴンクールとの親交のおかげで未発表の刊本を所持するに至り，それが遺品としてジルベルトへ継承されたと考えるべきなのか。あれこれ謎は尽きない。

いずれにせよ『見出された時』という小説の解決篇にゴンクールの擬似日記が差し挟まれたのは，文体模写を「実践的文学批評」（1908 年 3 月 11 日のフランシス・シュヴァシュ宛て書簡[21]）とみなすプルーストが，これを文学の根拠を問いただす機会としたからにほからない。年代がわずかに異なるものの，コンティ河岸のヴェルデュラン夫人のサロンを描写したプルーストの文章（III, 703;⑪ 21 以下）と，それと同じサロンを描いた擬似ゴンクールの文章とを読み比べてみるといい。もちろん両者には，夫人邸のそばに実在する小物店「オ・プチ・ダンケルク」への言及をはじめ，ヴェルデュラン夫人のエルスチール批判や会食者のホラ話など，多くの共通点が含まれる。そのうえで両者の相違に注目すれば，プルーストのいう「実践的文学批評」の意味が見えてくるはずである。

第一に際立つのは，古風なめずらしい語彙を多用するゴンクールの美文調で

ある。たとえばゴンクールは，画家ホイッスラーにかんするヴェルデュラン氏の著作を賞讃するとき，「その書には斬新なアメリカ人画家の手法，芸術的彩色が，絵画の洗練と美麗とを余さず愛でるヴェルデュランの筆にて，しばしば繊細を極めて表現される」と語る（IV,287;⑬ 61-62）。ここで「美麗」と訳した語 joliesses は，事物の美しさを言いあらわす文語としてはバルザックなどに先例が存在するが，ゴンクールは本物の『日記』でこれを偏愛し，人物の容姿を描くためにも用いた[22]。ヴェルデュラン氏がその「長広舌」において「一語一語を区切る」（IV,287;⑬ 62）さまを擬似ゴンクールが言いあらわした名詞 épellement もめずらしい語で，辞書が一般に記載する語は épellation である。『トレゾール仏語辞典』は épellement という綴りの存在を注記し，ゴンクールの『日記』とプルーストの本箇所のみを用例に挙げる[23]。「フランスや異国の美品」という箇所の「美品 jolités」なる語も，一般の辞書に記載がない。『トレゾール仏語辞典』はこれに bibelot（かわいい置物）という語釈を与え，プルーストのこの箇所を用例に挙げる[24]。

これらのめずらしい語彙に加えて，プルーストが皮肉をこめて強調しているのは，ゴンクールの美文調である。文体模写の作者は，擬似ゴンクールにたとえばつぎのような比喩を使わせている。「折しも黄昏時（たそがれどき）となり，トロカデロの塔のかたわらには残照の最後の灯（ともしび）のごときものがただよい，眼前の塔は心なしか古（いにしえ）の菓子職人がスグリのゼリーを塗りこめたかと見える」（IV,287-288;⑬ 62）。一見したところ華麗で鮮やかな表現のように思われるが，トロカデロの塔が「古（いにしえ）の菓子職人がスグリのゼリーを塗りこめたかと見える」必然性は判然としない。

このようにめずらしい語彙を駆使する美文調には，『18 世紀の美術』においてシャルダンやヴァトーらの絵画を賞讃し，新古典主義的文体を好んだエドモン・ド・ゴンクールの趣味が反映されている。ところがプルーストは，ゴンクールを含む 19 世紀作家の文体模写を発表して間もない 1908 年 11 月 6 日，ストロース夫人宛ての書簡において，「18 世紀や 19 世紀初頭の新古典主義者」の文体を厳しく批判していた。そのなかでプルーストは「言語を擁護する唯一のやりかたは，それを攻撃すること」にあるとの逆説を弄したうえで，「フランス語を擁護したければ，実際には古典フランス語とは正反対のものを書くはめになる」と断言し，そうした革新を実践した作家として「ルソー，ユゴー，フロベー

ル，メーテルランク」の名前を挙げていた[25]。『見出された時』の文学論において「作家にとって文体とは〔…〕テクニックの問題ではなくて，ヴィジョンの問題だ」(IV,474;⑬490-491）と喝破するプルーストにとって，新たな世界の見方を開示しない美文は，もっとも唾棄すべきものと映ったにちがいない。コンブレーに登場したスノッブの典型たるルグランダンが弄ぶ,「ときあたかも黄金色の月がのぼり，玉虫色の水面に航跡をひいて戻ってくる小舟は〔…〕」(I,130;①292）などといった美文調の口上も，プルーストが皮肉をこめて描いたものである。

この模作のなかでゴンクールの文章の特徴として強調されているのは，めずらしい品々の細密な描写であり，その品々へのフェティシズムともいうべき執着である。ヴェルデュラン邸で供される極上ワインにかんしても，プルーストは擬似ゴンクールにその銘柄と由来とを正確に言わしめている。「眼前のヴェネチアン・グラスになみなみと深紅の宝石のごとく注がれるは，モンタリヴェ氏の競売にて購入された極上のレオヴィルである」(IV,290;⑬74)。何度も内相を務めたカミーユ・ド・モンタリヴェ伯爵（1810-1880）は，ルイ＝フィリップ王の親友で，その遺言執行人になった。レオヴィルは，ボルドーの北北西に位置するサン＝ジュリアン＝ベシュヴェルのシャトーで産する当地最高の銘柄ワインである[26]。この種の物質的細部へのこだわりは，プルーストの文学にはけっして見られない。たとえば『ソドムとゴモラ』において落魄したクレシー伯爵を見かねた「私」が相手をバルベックの豪華な晩餐に招待してやったとき，伯爵は「とりわけワインは室温（シャンブレ）にすべきものは室温にさせ，冷やすべきものはワインクーラーの氷で冷やさせた。食事の前後に，ポルトや高級蒸留酒の日付や番号まで指示するときは，一般の人は知らないものの氏が精通するある公爵位の設けられた経緯を指摘するさまを想わせた」(III,469;⑨513）という。このようにプルーストは，高級酒の銘柄をなんら具体的に記していない。

擬似ゴンクールのフェティシズムは，とりわけヴェルデュラン家の横に位置する「オ・プチ・ダンケルク」をめぐる一節において顕著にあらわれる。この店はダンケルク出身のグランシェが18世紀にパリのコンティ河岸3番地に開いた骨董屋で，当時は「プチ・ダンケルク」の語が「粋な小物や装身具」[27]の代名詞になるほど繁盛した。18世紀末以降にはワイン店となり，1913年にとり壊されるまで「オ・プチ・ダンケルク」を名乗った。『囚われの女』の時代設定と

ほぼ同時期の1900年にアジェが撮影した店の玄関の写真が残っている。戸口上部に店名が記され，その上方に掲げられた帆船は店の看板（パリのカルナヴァレ博物館所蔵）である[28]。

『囚われの女』では，ヴェルデュラン家の夜会へ向かう「私」とブリショがコンティ河岸で出会ったとき，ブリショがこの店を暗示してこう言う。「こうしてお会いするのは，もはや大シェルブールのそばではなくて，小ダンケルクのそばですな」（III,703;⑪21-23）。この発言は，これから向かうヴェルデュラン家の館が，シェルブール（ブリショが「大」を付したのは以下の「小」との対比）から遠くない別荘ラ・ラスプリエールではなく，ベルギー国境近くの港町ダンケルクならぬ「小（プチ）ダンケルク」なる店のそばに所在するというほのめかしである。この発言を聞いた「私」は「うんざり」する。「その意味するところを理解できなかったからであるが，さりとてブリショにそれを訊ねる気にはならなかった。軽蔑されるのを怖れたからではなく，氏の説明をくどくど聞かされるのを怖れたのだ」という（III,703;⑪23）。プルーストは「私」の無関心を強調することで，大学教授ブリショの衒学的駄弁を批判したのである。

これにたいして擬似ゴンクールはこの店についてこう語る。「ヴェルデュラン夫妻の館にほぼ隣接する「プチ・ダンケルク」の看板に再会した私は，突如この界隈を再愛する情に駆られた。これはガブリエル・ド・サン＝トーバンの鉛筆デッサンなり薄塗りなりの挿絵に描かれたものを除けば残存する珍しき店のひとつである。18世紀の好奇心旺盛な人士が閑暇の折にやって来て値切らんとしたのは，フランスや異国の美品，すなわち「プチ・ダンケルク」の勘定書の謳う「工芸の粋を尽くした最新の品々」である」（IV,288;⑬64）。プルーストは，『囚われの女』における「私」とは対照的に，擬似ゴンクールを当店の「工芸の粋を尽くした最新の品々」へ並々ならぬ好奇心を寄せる人間として描いている。またゴンクールの18世紀への特別な関心を浮き彫りにするため，同世紀パリの日常生活を描いた画家ガブリエル・ド・サン＝トーバン（1724–1780）がデッサンに採りあげた他の店にも言及させている。実際ゴンクールは，プルーストも愛読していた『18世紀の美術』[29]のなかで，サン＝トーバンの「版画作品」目録を作成，その「24」番に「金物商ペリエの宣伝チラシ」（1767）を記載していた[30]。このサン＝トーバンのチラシの上部には，「黒人の顔」を看板とする金物商「ペリエ」の所在地ラ・メジスリー河岸（シャトレー広場の西側）が記さ

れ，画面右手には，店番の女性の前に腰かけて，錠前と鍵を手にした客が描かれている。三角形の空白部には店の商品の宣伝が書きこまれる予定だった[31]。

おまけにエドモンは世紀末，「金物商ペリエの宣伝チラシ」を購入していた[32]。この蒐集趣味こそ，プルーストや「私」には見られない，『日記』の著者のきわめて顕著な特徴である。プルーストはこの蒐集趣味を皮肉るためであろう，サン＝トーバンのチラシと構図がよく似た「オ・プチ・ダンケルク」の勘定書[33]をゴンクールに蒐集させ，「思うにこの勘定書の印刷物を所持するはヴェルデュランと私のみであろうか，これぞルイ 15 世治下に勘定のため用いられた装飾付用箋のまさしく傑作，レターヘッドには船を何艘も浮かべる波立つ海が描かれている」（VI, 288 ; ⑬ 64-65）と，この蒐集を自慢させている。

この記述によると，「オ・プチ・ダンケルク」の勘定書に描かれた「波立つ海」は，擬似ゴンクールに「「牡蠣と訴訟人」のフェルミエ・ジェネロー版に添えられて然るべき挿画の波立つ海」（VI, 288 ; ⑬ 65-69）を想わせたという。ここにいうフェルミエ・ジェネロー版とは，アンシャン・レジーム期に徴税の特権を有した数十名の徴税請負人フェルミエ・ジェネローが資金を出しあって出版したラ・フォンテーヌ『コント』の挿絵入り豪華版上下 2 巻（1762）を指す。この版には，画家シャルル・エゼン（1720–1778）の代表作とされる挿絵数十点が収録されていた。実際ゴンクール兄弟は『18 世紀の美術』で同版を「類を見ない豊かな版」と賞讃していた[34]。この挿絵のなかで「波立つ海」が描かれているのは，「ガルブ王の婚約者」と題するコントに添えられた図版 1 点[35]に限られる。ところがラ・フォンテーヌの『寓話』にはそもそもフェルミエ・ジェネロー版など存在せず，ゴンクールが言及する「牡蠣と訴訟人」（『寓話』9 巻 9）には，「砂浜」で見つかった「牡蠣」こそ話題になるものの，「波立つ海」は出てこない。これら矛盾点を指摘した『見出された時』のプレイヤッド版注は，この矛盾の責任をプルーストに帰すべきかゴンクールに帰すべきか判然としないと指摘する[36]。しかし管見によれば，小説本文の「「牡蠣と訴訟人」のフェルミエ・ジェネロー版に添えられて然るべき挿画」という文言は，フェルミエ・ジェネロー版の「ガルブ王の婚約者」の挿絵のように，かりにエゼンが「牡蠣と訴訟人」の挿絵を描いたなら，という非現実仮定を前提として擬似ゴンクールに言わしめたものと解釈すれば，なんら矛盾なく理解できる。

めずらしい蒐集品を崇めるフェティシズムは，この擬似日記ではゴンクール

のみならず,「黒い真珠のネックレス」の由来をとくとくと語るスワンにも認められる。女主人が身につけた「黒い真珠のネックレス」は，スワンによれば「アンリエット・ダングルテールがラ・ファイエット夫人に与えた品で，ラ・ファイエット夫人の末裔の所蔵品売り立てにてヴェルデュラン夫人が購入したときは純白の真珠であったが,〔…〕昔ヴェルデュラン夫妻が住んでいた屋敷の一部が火災に遭った折，焼け跡の宝石箱から発見されたときは真っ黒になっていたという」(IV,293;⑬ 83)。

この逸話をスワンに語らせるためにプルーストは，ゴンクールの 1893 年 4 月 26 日付の日記に記された「ロンドン近辺」の火災を情報源とした。宝石箱にはいっていた真珠のネックレスは，火事の焼け跡から出てきたとき実際「真っ黒になっていた」という[37]。しかしその真珠が「アンリエット・ダングルテールがラ・ファイエット夫人に与えた品」だとスワンの披露する来歴はもとより，それがヴェルデュラン家の火事 (III,706;⑪ 30) で真っ黒になったという経緯は，もちろんプルーストの創作である。そもそも『失われた時を求めて』においてスワンは,「骨董や画にうつつを抜かし」,「蒐集品を詰めこんだ古い館」に住んでいることを「私」の大叔母から軽蔑されていた (I,16;① 50)。また「あえて自分の意見を持たず，正確な情報を丹念に提供できれば安心と決めこんでいるように見える」態度には「許しがたいところがある」と，語り手からも批判されていた (I,97;① 224)。プルーストは，コンティ河岸のサロンにゴンクールと並んでスワンを登場させることによって，両者に共通する蒐集家のフェティシズムを批判したと考えるべきであろう。なぜなら「美は対象のなかにあるのではない」(「シャルダンとレンブラント」[38]) と考えるプルーストにとって，このようなフェティシズムは芸術上の「偶像崇拝」(「ジョン・ラスキン」[39]) として糾弾すべき態度だからである。

これら擬似ゴンクールのこまごまとした記述を読んだ「私」は,「注意ぶかく耳を傾けるすべもじっくりと見つめるすべも心得」ないことに (IV,295;⑬ 88),「文学にたいする天賦の才の欠如」(IV,301;⑬ 102) を痛感するが，これはプルースト自身の見解ではない。プルーストは 1922 年 5 月，ゴンクール兄弟の評価を問う「ゴーロワ」紙のアンケートに答え，兄弟は「真実の奉仕者としての義務」を果たすかわりに「観察し，メモを取り，日記を書いたが，それは偉大な芸術家のなすべきことではない」[40] と断言している。ゴンクールの擬似日記を読み

おえた「私」もまた，自分のうちに存在するのは，ゴンクールのような観察する人間ではなく，「さまざまなことがらに共通するなんらかの普遍的精髄が顕在化するときにのみ〔…〕生気をとり戻す」「間歇的な人物」（IV,296;⑬ 89）だと述懐する。この「間歇的な人物」が捉える「普遍的精髄」とは，最終篇の末尾で開陳される文学観の基礎となる無意志的記憶によって開示されるエッセンスにほかならない。「私」とプルーストの理想とする文学は，ゴンクールのそれとは根本的に異なるのだ。

ゴンクールが十八番とする正確な観察にも，この文体模写は疑問を投げかける。もちろんプルーストは，擬似日記の間違った記述をすべてゴンクールのせいにしているわけではない。たとえばこの模作には「主（あるじ）が断言するに，バック通りの名称は――私にはまるで想いも寄らぬことながら――ミラミオーヌと称した古の修道女らがノートルダム大聖堂のミサに赴かんとして乗った渡し船に由来する」（IV,288;⑬ 64）という記述がある。「ミラミオーヌ」とは，ミラミオン夫人（1629-1696）が 1675 年以降，パリのトゥールネル河岸 47 番地に創設した出入り自由の修道院「聖ジュヌヴィエーヴ修道会」の通称である（1792 年に消滅）。この未亡人は，さる貴族の求愛を斥けて生涯の貞節を誓い，子女の教育や慈善活動に従事したという[41]。修道女たちは，トゥールネル河岸の向かいに位置するノートルダム大聖堂へ赴くのに，わざわざ遠くのバック通りから渡し船に乗ったはずがない（バック通りの渡し船は，対岸のチュイルリー宮殿建立の石材を運ぶために設置された）。この珍説は，プレイヤッド版の注[42]が指摘するような擬似ゴンクールの間違いではなく（ゴンクールは「私にはまるで想いも寄らぬことながら」と断っている），「主（あるじ）が断言するに」という擬似ゴンクールの注釈に明らかなように，プルーストが故意にヴェルデュラン氏に言わせた間違いと考えるべきである。

とはいえプルーストは，擬似日記の書き手に多くの間違ったことを言わせている。たとえばゴンクールは，「クールモン家の私の叔母」（IV,288;⑬ 64），つまりジール・ルバ・ド・クールモンの夫人，旧姓名ネフタリ・ルフェーヴル（1802-1844）が，コンティ河岸の近くを意味する「このあたり」（同上）に住んでいたと言うが，この叔母が実際に住んでいたのはオペラ座に近い「ラ・ペ通り」であった[43]。ほかにもこの模作でゴンクールは「フロベールがわれら兄弟をトルーヴィルへ連れていった」（IV,291;⑬ 78）と書いているが，リーヴル・

ド・ポッシュ版の注によると，ゴンクール兄弟はル・アーヴルに滞在中の1866年1月，クロワッセにフロベールを訪ねたことはあるが，両者が揃ってトルーヴィルへ出かけた事実はないという[44]。プルーストは，この点，擬似ゴンクールにわざと間違いを犯させ，細密な描写を旨とする文学のいい加減さを際立たせたのではなかろうか。

そう解釈されるのは，熱心な日本美術の蒐集家として知られるゴンクールに，プルーストがわざとばかげたことを言わせている箇所が散見するからである。ヴェルデュラン夫人の料理に心酔したゴンクールは，「単なる馬鈴薯（ばれいしょ）のサラダが，日本の象牙のボタン型のごとき固さ」（IV,290;⑬74）を備えていると言う。ここで「ボタン型」と訳した語 boutons は，ゴンクールをはじめ19世紀後半の日本愛好家たちが盛んに蒐集した「根付」（江戸時代に携帯品を帯に吊すための留め具）を指すのかもしれない。というのもこの留め具は，1898年に実施されたゴンクール蒐集品競売のカタログでこそ「ボタン型の象牙製根付」[45]と記載されているが，ゴンクールが日本の品々で飾りたてた自邸を1881年に描いた『ある芸術家の家』では，ただ「一連のボタン型」[46]と記されていたからである。それにしても「日本の象牙製ボタン型のごとき固さを備えたジャガイモ」というのは，どうにも説得力を欠く唐突なたとえと言わざるをえない。筆者が調べたところ，ゴンクールの本物の『日記』にはこのような奇妙な記述は存在せず，これはプルーストの純然たる創作である。おそらくプルーストは，蒐集してきた根付の固さをジャガイモの固さにまで重ね合わせてしまうゴンクールの日本趣味のばかばしさを皮肉ったのであろう[47]。

擬似日記に記されたヴェルデュラン夫人の発言にも奇妙な点を指摘できる。夫人はゴンクールを食卓につかせる際，「テーブルには日本のキクだけを飾りまして，すべて稀にみる逸品の花器に活けてございます」（IV,288-289;⑬69）と自画自賛する。ただしキクはフランスと同じく日本でも墓に飾る花であるから，食卓に「キクだけ」を飾るのが夫人の豪語する「日本人と同じように活ける」（I,592;③381）方針と合致しているのか定かではない点に，プルーストの皮肉が感じられる。

プルーストは，このような濡れ衣を着せてまで，なぜゴンクールの文業を揶揄し，批判したのか。それは逆説になるが，ここで批判されたフェティシズムといい，長文になりがちな美文といい，ともにプルースト自身の「悪癖」だっ

たからにほかならない。ゴンクールの擬似日記を読んだ「私」も，それが自分の目指す文学ではないことを自覚しながらも，「まだ残存しているものならプチ・ダンケルクの店も見に行きたい」(IV,295;⑬ 88) と，ゴンクールと同様のフェティッシュな願望をいだく。そもそもプルーストが 1908 年に文体模写の対象としたゴンクール，バルザック，サント＝ブーヴこそ，自分が心底から愛読していながら，『サント＝ブーヴに反論する』などの評論において厳しく批判した作家である。このような愛着と批判，受容と相克は，矛盾するかに見えて，あらゆる芸術の創造過程に不可欠な葛藤として介在しているのではないか。プルーストが自身の文体模写について 1919 年 8 月にラモン・フェルナンデスに語ったつぎの述懐は，いみじくもこの葛藤の機微に触れている――「文体模写は私にとって精神衛生上の問題でした。生来の偶像崇拝と模倣という悪癖を清算しなければならなかったのです」[48)]。ゴンクールの文体模写は，「偶像崇拝」や「模倣」とその克服という文学創造の核心を問う「実践的文学批評」として，本作の解決篇たる『見出された時』に配置されたのである。

*

しかし私は，『見出された時』のなかにゴンクールの「未発表」の擬似日記が挿し挟まれた意義は，プルースト自身の文学観とは異なる視点を批判的に提供するだけにはとどまらないと考える。というのもこの模作に登場したゴンクールは，語り手の「私」が報告したヴェルデュラン夫人のコンティ河岸のサロンについて，観察に長けた人間としてべつのヴィジョンを提示しているからである。この観点に立つと，ヴェルデュラン夫人のサロンから放逐されたはずのスワンがここにすがたを見せていることにも，新たな解釈の余地があるように思われる。スワンは第 1 篇の「スワンの恋」の後半で，たしかにヴェルデュラン夫人のサロンから追放されていた。しかし第 2 篇の「スワン夫人をめぐって」を注意ぶかく読めば，ヴェルデュラン夫人はオデットが嫁いだスワン家をときどき訪ねていたことがわかる。スワンが「オデットとヴェルデュラン夫人が年に 2 回だけ訪問し合うのを許していた」(I,589;③ 376) からである。しかしそれだけではない。じつは「スワンは，ヴェルデュラン夫人の夜会に妻をつれて行きはしたが，夫人がオデットを訪ねてきたときは席を外すようにしていた」(I,590;③ 377，傍点は筆者）という記述が存在する。擬似ゴンクールは（というよりゴ

ンクールに扮したプルースト）は，語り手の「私」が報告していない（あるいは知らない）新たな事実をわれわれに暴露する役割をも果たしているのである。

擬似ゴンクールが読者に知らせてくれる新事実のなかでさらに驚くべきは，作中のヴェルデュラン氏が「「ルヴュ」誌の元批評家にして，ホイッスラーをめぐる一書の著書」（IV,287;⑬61）であったという事実だろう。ヴェルデュラン氏といえば，第1篇や第5篇に描かれたパリの自宅サロンでも，第4篇に出てくる別荘ラ・ラスプリエールのサロンでも，口数が少なく，意地悪な妻の意向を実行する役目しか果たさず，サロンの常連サニエットをいじめるほかに能のない男として描かれていた。これはどう解釈すべきなのか。ヴェルデュラン氏がかつて美術批評家であったとする擬似ゴンクールと，それにはなんら言及しない語り手「私」のどちらを信じるべきなのか。筆者は，擬似ゴンクールが指摘するとおり，やはりヴェルデュラン氏は美術批評家であったと考える。

というのも擬似ゴンクールによるこの言及は，最終篇のこれまた等閑視されているつぎの一節と呼応しているからである。ヴェルデュラン氏が死んだとき，「その死を悲しんだのはただひとり，だれあろう，エルスチールだった」（IV,349;⑬213）という一節である。そこにはこう記されている。「エルスチールは，自分の絵画について最も正しい見方をしてくれ，この絵画がいわば愛しい想い出として棲みついていた目と頭脳とがとりわけヴェルデュラン氏とともに消えゆくのを見ていた〔…〕。もちろん同じように絵画を愛する若者たちがあらわれてはいたが，とはいえその若者たちが愛するのはべつの絵画であり，その若者たちはスワンやヴェルデュラン氏のように，エルスチールを正当に評価できるだけの趣味の教えをホイッスラーから受けていたわけでもなく，真実の教えをモネから受けていたわけでもなかった」（IV,349;⑬214-215）。この一節は，ゴンクールの擬似日記に記されていたこと，つまりヴェルデュラン氏が「「ルヴュ」誌の元批評家にして，ホイッスラーをめぐる一書の著書」であったことを踏まえなければ，とうてい理解できないだろう。

ヴェルデュラン氏をめぐるこの遅ればせの開示は，同氏やスワンのみならず，さまざまな人物について，われわれの知る『失われた時を求めて』に明示された物語の背後に，語り手が黙して語らぬ予想外の現実が存在することを暗示する。第2篇の「スワン夫人をめぐって」を注意ぶかく読んでも，振られたはずのスワンがなぜオデットと結婚できたのか，その経緯はなんら説明されていな

い。そうだとすると，「私」の生涯にも，『失われた時を求めて』には語られざる多くの事実がさらに隠されているのではないか。プルーストの小説は，よく言われるように円環をなしてはいるが，その円環はそれ自体で自足しているわけではない。ゴンクールの擬似日記は，『失われた時を求めて』が，自分自身の物語にさえ疑問を投げかけさせる，自己否定の契機をはらんだ前衛小説であることを示唆しているのである。

註

＊）本稿は 2019 年 9 月 29 日，大阪大学文学部にて開催された日仏シンポジウム « Proust et l'esthétique de la réception » において筆者がフランス語で発表した論考 « Le pseudo-inédit de Goncourt dans *Le Temps retrouvé* » の日本語版である。

1）『失われた時を求めて』からの引用は，ジャン＝イヴ・タディエ編纂プレイヤッド版（Marcel PROUST, *À la recherche du temps perdu*, édition publiée sous la direction de Jean-Yves TADIÉ, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 4 vol., 1987-1989）に拠り，岩波文庫版の拙訳を掲げる（プルースト作／吉川一義訳『失われた時を求めて』，岩波文庫，全 14 巻，2010–2019 年）。括弧内の数字は原文および訳文の巻数と頁数。

2）ゴンクールの日記出版とプルーストの文体模写については，上記拙訳・第 13 巻 61 頁の注 46 を参照。

3）プルースト本人の回想による（M. PROUST, « Les Goncourt devant leurs cadets », in *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles*, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, p. 642）。

4）*Les Pastiches de Proust*, édition critique et commentée par Jean MILLY, Paris : Armand Colin, 1970, pp. 153-170.

5）Carnet 1, f°s 19 r°-20 r° ; *Le Carnet de 1908*, établi et présenté par Philip KOLB, dans *Cahiers Marcel Proust 8*, Gallimard, 1976, pp. 72-74 ; Marcel PROUST, *Carnets*, édition établie et présentée par Florence CALLU et Antoine COMPAGNON, Paris : Gallimard, 2002, pp. 64-66.

6）和田章男「プルーストと「ゴンクールの日記」」，『ステラ』第 31 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2012 年 12 月，93–94 頁；同著『プルースト 受容と創造』，大阪大学出版会，2020 年，85–86 頁に再録。

7）Jean MILLY, « Le pastiche Goncourt dans "Le Temps retrouvé" », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 1971, n° 5-6, p. 816 ; article repris dans Jean MILLY, *Proust dans le texte et l'avant-texte*, Paris : Flammarion, 1985, p. 186.

8）Kazuyoshi YOSHIKAWA, « Études sur la genèse de *La Prisonnière* d'après des brouillons inédits », thèse présentée à l'Université de Paris-Sorbonne, 1976, t. I, pp. 2-3 et 8-11.
9）ラップランドはスカンジナビア半島最北部地域. *Correspondance de Marcel Proust*, texte établi, présenté et annoté par Philip KOLB, Plon, t. XIV, 1986, pp. 77-78.
10）ゴンクール作品のデンマーク人翻訳家。
11）ともにエドモン・ド・ゴンクールの小説。『ラ・フォースタン』（1882）は表題名の女優を，『シェリ』（1884）は裕福なブルジョワ娘を描く。
12）Journal du 17 mai 1885 : Edmond et Jules de GONCOURT, *Journal*, éd. Robert Ricatte, Paris : Robert Laffont, coll. « Bouquins », 1989, t. II, p. 1159.
13）Cahier 55, f° 63 v° ; Jean MILLY, *Proust dans le texte et l'avant-texte*, *op. cit.*, p. 189.
14）Marcel PROUST, *Carnets*, éd. cit., pp. 299-304, notes 138, 140, 145, 146, 151 et 167.
15）Edmond et Jules de GONCOURT, *Journal*, éd. cit., t. I, p. 20, note 2.
16）Annick BOUILLAGUET, *Proust et les Goncourt : le pastiche du Journal dans* Le Temps retrouvé, Paris : Minard, coll. « Archives des Lettres Modernes », n° 266, 1996, p. 13.
17）« Un volume du journal inédit des Goncourt », Cahier XV, f° 88 r°.
18）Annick BOUILLAGUET, *op. cit.*, p. 46.
19）Gérard GENETTE, *Figure III*, Paris : Éd. du Seuil, 1972, p. 126.
20）小説の本文（IV, 215 ; ⑫ 486-487）と，吉川訳の注 409 および注 413 を参照。
21）*Correspondance de Marcel Proust*, éd. cit., t. VIII, p. 59.
22）*Grand Larousse de la langue française*, Paris : Larousse, t. IV［1975］, p. 2870.
23）*Trésor de la langue française informatisé*. 見出し « épellation » の Rem. を参照。
24）*Ibid*. 見出し « jolité » のB項を参照。
25）*Correspondance de Marcel Proust*, éd. cit., t. VIII, p. 277.
26）元来，単一のブドウ園であったが，19 世紀前半にレオヴィル・ラス・カーズ，レオヴィル・バルトン，レオヴィル・ポワフェレの 3 つのシャトーに分割されて現在に至る（吉川訳 ⑬ 75，注 85 参照）。
27）*Grand Larousse de la langue française*, *op. cit.*, t. V［1976］, p. 4205.
28）吉川訳・第 11 巻 22 頁の図 1 と解説を参照。
29）Lettre adressée à Mme Alphonse Daudet le 6 mai 1905 : « Moi qui ne connais guères directement l'œuvre des Goncourt, qui ne sais guères d'eux que l'admirable figure d'Edmond de Goncourt vue chez vous et l'enchantement que j'ai trouvé à certains livres comme l'*Art au XVIIIe siècle* […] »（*Correspondane de Marcel Proust*, éd. cit., t. XVII, p. 536）.
30）Edmond et Jules de GONCOURT, *L'Art du Dix-huitième siècle*, troisième édition, Paris : A. Quantin, 1880-1881, t. I, p. 422.
31）吉川訳・第 13 巻 68 頁の図 4 と解説を参照。

32）« […] Acquis par S. Meyer ; Edmond de Goncourt, Paris ; vente Goncourt, Paris, 26-28 avril 1897 », *Gabriel de Saint-Aubin : 1724-1780*, catalogue de l'exposition au Louvre, Paris : Somogy éditions d'art, 2007, p. 218.

33）吉川訳・第 13 巻 69 頁の図 5 を参照。

34）Edmond et Jules de GONCOURT, *L'art du XVIIIe siècle*, Paris : Charpentier, 1881-1882, t. III, p. 3.

35）*Contes et nouvelles en vers par M. de La Fontaine*, édition dite des Fermiers généraux, Amsterdam [Paris], 1762 (reproduit par le Club Français du Livre en 1964), t. I, pl. entre p. 92 et p. 93. 吉川訳・第 13 巻 70 頁の図 6 を参照。

36）Éd. cit., t. IV, p. 1191 (note 12 de la page 288).

37）Edmond et Jules de GONCOURT, *Journal*, éd. cit., t. III, p. 819.

38）M. PROUST, *Essais et articles*, éd. cit., p. 380.

39）M. PROUST, *Pastiches et mélanges*, éd. cit., p. 130.

40）M. PROUST, *Essais et articles*, éd. cit., p. 642.

41）以上の記述はつぎの事典による―― Jacques HILLAIRET, *Dictionnaire historique des rues de Paris*, Paris : Les Éd. de Minuit, 1963, t. II, p. 568.

42）« […] erreur, non de Proust, mais du pseudo-Goncourt », *À la recherche du temps perdu*, éd. cit., t. IV, p. 1191 (note 6 de la page 288).

43）Edmond et Jules de GONCOURT, *Journal*, éd. cit., t. III, p. 748 (journal du 30 août 1892).

44）M. PROUST, *Le Temps retrouvé*, texte établi, présenté et annoté par Eugène NICOLE, Paris : Librairie générale française, coll. « Le Livre de Poche classique », 1993, p. 498 (note 6 de la page 67).

45）« Netsuké d'ivoire en forme de bouton », *Objets d'Art japonais et chinois. Peintures, estampes composant la collection des Goncourt*, ventes à l'Hôtel Drouot, mars 1897, p. 222.

46）« […] une série de boutons » : Edmond de Goncourt, *La maison d'un artiste*, Paris : Charpentier, 1881, t. II, p. 221.

47）この「日本の象牙のボタン型」をめぐる考察は，すでにつぎの論文に発表したものである――吉川一義「『失われた時を求めて』におけるジャポニスム」，小林宣之編『明治初期洋画家の留学とフランスのジャポニスム』，水声社，2019 年，182-183 頁。

48）*Correspondance de Marcel Proust*, éd. cit., t. XVIII, p. 380.